

第1問

次の文章は、出口治明「二十世紀日本の目標『世界一子どもを育てやすい国』にする」の一節である。この文章を読んで後の問い（問1～問6）に答えよ。

【得点 50点】

解答番号

1

く

11

◆若者、ヨソ者、バカ者の力で

ある講演会に呼ばれたとき、「出口さんは⁽¹⁾柔ナンな発想ができるから、a 成功体験は捨てるべきというテーマで話してください」と、頼まりました。僕は、「それは無理です。^A 成功体験を捨てなきやダメだという考え方自体が間違っています」と、答えました。成功体験ほど気持ちがよく、忘れたくないものはないからです。特に仕事で、苦勞の末に得た成功体験など捨てられるはずがない。現在の社会の⁽²⁾上ソウ部に陣取る高齢者の輝かしい成功体験も、捨てられるはずがありません。ならば、^B彼らを変えようとするよりも、成功体験を持たない人たちが社会を変えていくことを考えればいい。

成功体験を持たない人たちは、b 経験のない若者です。それに、この国での成功体験がない外国人。さらには、バカ者です。アイルランドの作家バーナード・ショーが、次のようなことを言っています。

「合理的な人間は、自分を世界に適応させる。非合理的な人間は、自分に世界を適応させようと粘る。あらゆる進歩はこの『非合理的な人間』に頼っているのだ」

僕は、バカ者というのは、この「非合理的な人間」のことだと思っています。

^C 若者・ヨソ者・バカ者を生かす秘訣は、必ず集団で、カタマリごと入れることです。そうしないと排除されてしまう。だからc、6時に帰れるのに上司がそれを許さない⁽³⁾ 雰囲気があるとすれば、若い人同士、何人かで申し合わせて一斉に帰ってしまえばいい。成功体験に固執しているような上司はたいがい気が弱いですから、4、5人でまとま

って帰られると、問いたただすどころか、逆に、何かあったのかと心配になるのです。何かを変えようとしたら、みんなで一斉に声を挙げる必要があります。そうすれば、職場の中で定時に帰ることが当たり前になっていく。こういうことは、伝染するのです。安心のいちばんのベースは、「自分はひとりではない」ということ。反対に、不安は「こんなことをしているのは私だけじゃないだろうか」と孤立することから生まれます。

◆ 安定は停滞の裏返し

歴史を振り返ってみれば、⁽⁴⁾ 斬シなアイデアは多様性のある社会からしか生まれてこなかったことがよくわかります。移民国家であるアメリカがいちばんいい生きた実例でしょう。イノベーションを起こそうと思ったら、社会の多様性が不可欠です。多様性は、何も外国人ばかりではなく、女性や障がい者、性的マイノリティ（LGBT）、さらには高齢者が社会に⁽⁵⁾ コン在してはじめて、生まれてくるのです。日本が安定しているのだとすれば、それは、停滞していることの裏返しです。D 日本の社会にダイナミズムを起こそうと思ったら、ひとつには女性の地位を上げること。そして、産みたいときに赤ちゃんを産める社会をつくることです。何かを変えるときには、仕組みごと変えるのが一番です。

問 1 本文中(1)～(5)の傍線部のカタカナと同一の漢字を使うものを次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

1

5

(1) 柔ナ|ン

- ① 三ナ|ン坊が生まれる
 ③ 無理ナ|ン題の押し付け
 ⑤ 部屋のナ|ン戸
 ④ ② 渡り鳥のナ|ン下
 自宅にナ|ン禁される

(2) 上ソ|ウ部

- ① ソ|ウ年の男性
 ③ 議論のソ|ウ点
 ⑤ リレ|ーの最後のソ|ウ者
 ④ ② 天下無ソ|ウの劍客
 震源地の断ソ|ウ

(3) 零イ|気

- ① 敵軍に包イ|される
 ③ 戦イ|を喪失する
 ⑤ 征イ|大將軍
 ④ ② 人前でイ|縮する
 テストの難イ|度

(4) 斬シ|ン

- ① シ|ン偽を確かめる
 ③ シ|ン辣な表現
 ⑤ 制度を刷シ|ンする
 ④ ② シ|ン体のシ|ンが冷える
 シ|ン略戦争

(5) コ|ン在

- ① 進む晩コ|ン化
 ③ コ|ン気の要る仕事
 ⑤ 将来に禍コ|ンを残す
 ④ ② コ|ン雑した会場
 貧コ|ン家庭

問2 本文中 a ㄱ c の三つの空欄に入れるのに最もふさわしい言葉を次の①ㄱ

⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。 6 ㄱ 8

- ① でも ② きつと ③ ぜひ ④ もし ⑤ まず

問3 傍線部A「成功体験を捨てなきゃダメだという考え方自体が間違っています」とあるが、それはなぜか。理由として最もふさわしいものを次の①ㄱ⑤のうちから一つ

選べ。 9

① 苦労をして成功した経験は、状況が変わっても、新たな仕組みを作る上で参考になるから。

② 成功体験を持たない人たちに活躍の場を与えようという発想が、そもそも間違っているから。

③ 成功体験は誰にとっても気持ちがよく、特に苦労を伴うものは捨てられるはずがないから。

④ 成功体験とは乗り越えるべきものであって、捨ててしまえばよいというものではないから。

⑤ 若者や外国人、バカ者はそもそも成功体験を持っていないので、捨てようがないから。

問4 傍線部B「彼らを変えようとするよりも、成功体験を持たない人たちが社会を変えていくことを考えればいい」とあるが、それはなぜか。根本的な理由としてふさわしい内容を文章全体から探し、「くだから」に続く形で本文から25字以内で抜き出し、解答用紙に記入せよ（句読点・記号等も一字に数える）。

問5 傍線部C「若者・ヨソ者・バカ者を生かす秘訣は、必ず集団で、カタマリごと入れることです」とあるが、それはなぜか。理由として最もふさわしいものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。10

- ① 若者・ヨソ者・バカ者が単独で行動すれば排除されてしまうが、一斉に行動すれば、それが当然のこととして受けとめられるから。
- ② 皆で一斉に行動すれば、自分一人だけではない安心感があるので、周囲の反対に対して気持ちに余裕ができるから。
- ③ 皆が一斉に行動している中で一人だけ別のことをすると不安になるので、若者・ヨソ者・バカ者の要求を聞き入れざるを得なくなるから。
- ④ 成功体験に固執する人物はたいがい気の弱さを持っているので、若者・ヨソ者・バカ者の行動を問いただせないから。
- ⑤ 若者・ヨソ者・バカ者が4、5人で行動すると、上司は何かあったのかと心配になり、自分の行動を反省するようになるから。

問 6

傍線部D「日本の社会にダイナミズムを起こそうと思ったら、ひとつには女性の地位を上げること。そして、産みたいときに赤ちゃんを産める社会をつくることです」とあるが、どういうことか。内容として最もふさわしいものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

11

- ① 日本の社会に多様性を導入するには、イノベーションを起こせるようなアイデアを生む人々に活躍の場を与える必要がある、ということ。
- ② 日本の社会にイノベーションを起こすには、多様性を生み出すような新しいアイデアを採用し、実行する必要がある、ということ。
- ③ 日本の社会に多様性を導入するには、これまで活躍できなかった人々に活躍できる場所と条件を準備し、仕組みを変える必要がある、ということ。
- ④ 日本の社会にイノベーションを起こすには、これまで活躍できなかった人々に活躍できる場所と条件を準備する必要がある、ということ。
- ⑤ 日本の社会を仕組みごと変えるには、日本の社会に多様性を導入し、多様な人材に活躍の場を与える必要がある、ということ。

第2問

次の文章は、浅田次郎の小説「壬生義士伝」の一節。幕末の京の警察組織

「新選組」で幹部を務めた斎藤一が、新選組隊士であった吉村貫一郎を回想する部分である。吉村は南部盛岡（現・岩手県盛岡市）の足軽で文武両道に秀でていたが、藩の給与（禄）だけでは妻子を養えず、やむなく脱藩して新選組に身を投じ、給金のすべてを国元の妻子に仕送りしていた。そんな吉村の人柄を、ある裕福な庄屋の娘が慕い、新選組幹部の間で吉村と娘との縁談が持ち上がる。本文はそれに続く内容である。

解答番号

12

く

19

【得点 50点】

「どないしいはった、吉村先生。ひとりでこないに酔わはって」

源之丞が差し向けた水を一息に飲み干すと、吉村は畳の上にかしこまって頭を下げた。

「拙者、今宵こそ源之丞殿に詫びねばならぬと思ひ——」

「はて、何の話ですやろ」

わしと 永倉の手前、源之丞はとぼけたのである。

壬生のおなごの話は聞いておるかな。さよう——八木邸の隣家の下働きをしておった

みよという娘のことじゃよ。

詳しいいきさつは知らぬが、そのみよを吉村と添わせてはどうかという話が、土方はじめ幹部連の間で持ち上がったのじゃ。むろん仲人役は源之丞よ。吉村はその縁談を、酔った勢いで断りにきたのやもしれぬ。

吉村は腰の大小（※出題者注…大刀と小刀）をはずしてかたわらに置くと、源之丞の膝元にごつんと額をぶつけて詫びた。酔うていたわりには、筋の通ったことを言うたよ。

「国元に残した妻子は、脱藩者の汚名を着てさぞ肩身の狭い思いをしておることでしょう。ならばこの縁談をしておに、拙者が養子となって家を出、倅が家督（※出題者注…一家の長の権利・義務）を相続して家族ともども国を離れ、土方先生のご縁を頼っていずれかの

御旗本にご奉公するというのは、願ってもないことにて——」
なるほど、そういう段取りがつけられようとしておったのかと、わしは永倉と顔を見合
わせたものよ。永倉はあの生真面目な¹ 仏頂面をしかめて、ひとこと「馬鹿な奴じゃ」と
呟いた。

「おい、吉村」と、永倉は野太い濁声^{だみごえ}を上げて、二人の間に割り入った。他人事^{ひとごと}とはいえ、
A よほど肚^{はら}に据えかねたのである。

「貴公、わがままもたいがいにせい」

永倉新八はいったいに裏表のない、まことに見たままの男であった。

「わがまま、でしょうか」

と、吉村は青白くなるほどに酔うた顔をもたげて永倉を見上げた。

「副長や八木殿が、貴公のためによかれと思うて^注心を摧^{くだ}いておるというに、言下に断る
とはどうしたことじゃ。わがままというほかはあるまい」

もしかしたら、この縁談話には永倉も一枚加わっておったのかもしれない。憤りは尋常で
はなかったからな。

永倉は松前脱藩。吉村は南部盛岡。ともに北国の出で、人付き合いの不器用なところも、
真面目一途な気性も似通っていた。日ごろから二人が親しくしておったのもたしかじゃ。

しかし永倉は正々堂々を判で捺^おしたような奴で、策というものを知らぬ。口も重い。そ
のくせ妙な仏心を持った男じゃ。吉村の境遇を何とかしてやらねばならぬと、源之丞や土
方に相談をしておったのであろうよ。そうじゃな。言い出しつべは永倉かもしれぬわ。

吉村はかしこまったまま、しばらく考えた。永倉に輪をかけて口下手な奴のことじゃ、
むろん考え直したのではなく、言い方を考えておったのじゃろう。

² 考えあぐねた末にようよう口にした吉村の言葉を、わしは忘れぬ。

「今の今、拙者は父として夫として、妻子を養うております。わがままなどと言うて下さ
りますな」

行く末の幸福などどうでもよい、という意味か。それとも考え及ばぬということか。と
もかく吉村は、おのれが今の今、妻子を食わせているのだと、それが幸福なのだと言うた

つもりだったのじゃろう。

正直なところわしは、わがままじゃと思うたよ。しかし永倉は本心どう感じておったのであるうな。わしは二十歳をいくらか出たばかりの若さじゃったが、永倉は吉村よりいくつか下で、すでに京の市中には所帯も持つておった。

永倉は濁声をいつそう張り上げて言うた。

「ならば妻子を京に呼べばよかろう。なぜそのようにせぬ」

できるわけはあるまい、とわしは思うた。できぬ理由は、当の永倉が誰よりも知っておったはずじゃよ。わしらは捨て駒じゃったからな。世の中がどう変わるにせよ、新選組に立派な明日のないことはわかりきっていた。世の行く末はわからずとも、これだけ人を斬つてただですむわけはないと、誰もが思うていた。

そのような場所に、愛する家族を呼べるか。近藤勇ですら、それだけはできなかつたのじゃよ。

永倉はできもせぬ正論を吐いたことになる。いかにも永倉らしい。正々堂々たる人物であるわりに、永倉があんがい隊士たちから嫌われていたわけは、つまりそのように時として正々堂々を振りかざす癖があつたからじゃ。

吉村はそのとき、蔑むように永倉を見上げたと思う。それから、こらえかねたようにこのようなことを言うた。

「拙者家内は百姓の出にござる。子らは足軽と百姓の子にござる。盛岡を捨てて生きることなどできませぬ」

それもたしかな理由にはちがいあるまい。

同じ脱藩者とはいえ、永倉新人は松前藩の江戸定府御取次役、百五十石の倅じゃ。吉村の事情など、わかっていたように実は何もわかっていたのかもしれない。

とたんに永倉は血相を変え、吉村の襟首を掴むと奥座敷まで引きずりこんだ。

「貧乏を看板にしやがって、百姓が何だ、足軽がどうした。おめえはわがまま者だ。みんなして生かしてやろうつてのに、なぜ死にたがる。死ぬのは俺たちだけでたくさんだ」

ふいに江戸弁でそんなことをまくしたて、永倉は吉村の上に馬乗りになって、無茶苦茶

に殴り始めた。

吉村はなされるがままじゃった。わしも源之丞も止めだてはしなかった。

からな。

C あの大兵たいひょうの永倉が、吉村の顔をさんざんに殴りつけながら泣いているのよ。言うにつくせぬ言葉を拳固げんこにするしかなかったのじゃろう。

注 1 源之丞：八木源之丞。壬生の郷士で新選組の後援者。結成当時、新選組は八木邸を屯所（拠点）としていた。

注 2 永倉：永倉新八。新選組幹部で神道無念流免許皆伝の剣客。

注 3 みよ：京都近郊・山科の庄屋の末娘。八木邸の隣の両替屋で行儀見習いのために下働きをしていた。

注 4 土方：土方歳三。新選組副長。非常に厳しい隊規を作り、「鬼の副長」と恐れられた。

注 5 御旗本：幕府直属の家臣。將軍に謁見する資格を持つ上級武士。

注 6 心を摧いて：新選組の隊規では隊士は一度加盟すると脱退が許されず、脱走を企てたものは死罪となるが、この時副長の土方は、吉村がみよと夫婦となる場合、特例で脱退を許すつもりでいた。

注 7 近藤勇：新選組の頭目（局長）。天然理心流第四代宗家の剣客。

注 8 江戸定府御取次役：江戸に定住する藩主への伝奏役。百五十石とは一年の禄がおおよそ米三百七十五俵の意。なお、吉村の国元での禄は年十四俵だった。

問 1 傍線部 1 ～ 3 の本文中の意味として最も適当なものを次の ① ～ ⑤ のうちから
それぞれ一つずつえらべ。

12

14

1 仏頂面

- ① 恐ろしい表情
- ② 優しい顔立ち
- ③ 愛想のない顔つき
- ④ 表情豊かな顔
- ⑤ 親しげな表情

2 考えあぐねた

- ① 考えがまとまった
- ② 考えるのに飽きた
- ③ 考えるのが嫌になった
- ④ 考えるのに困った
- ⑤ 考えるふりをした

3 血相を変え

- ① 恥じ入って
- ② 顔色を変えて
- ③ 軽蔑した様子で
- ④ 喜びを隠して
- ⑤ 感情をごまかして

問2 傍線部A「よほど肚に据えかねた」とあるが、永倉はなぜこのように感じたのか。理由として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

15

① 縁談話を断る吉村の気持ちに分からないわけではないが、そのために動いた新選組幹部や源之丞の面目をつぶすのは許せないから。

② 新選組幹部や源之丞が吉村に対して破格の条件を示しているのに、吉村が納得しようにしないから。

③ 吉村のために自分がこれほど骨を折っているのに、吉村がそうした苦労を理解せず、わがままばかり言うから。

④ 国元に残した妻子を口実にして、みよの気持ちを全く考えずに吉村が体よく縁談話から逃げようとしているから。

⑤ 新選組幹部や源之丞が吉村のために特別な善意で動いているのに、吉村がその善意を無駄にしようとしているから。

問3

傍線部B「わかっていたようで実は何もわかってはいなかった」とあるが、どういうことか。内容として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

16

① 永倉は吉村と同じ脱藩者ではあるが、藩が違えば事情が全く違い、南部藩独特の事情やそれを背景とした吉村の境遇は他藩の者にはわからない、ということ。

② 永倉は吉村と同じ北国の出身で気性も似たところがあるが、藩での役職や禄に大きな差があり、吉村の貧しさや不自由は理解できなかった、ということ。

③ 吉村と親しくしていた永倉は吉村の性格や考えを十分に理解しているつもりだが、互いに口下手であるために伝わらないことも多かった、ということ。

④ 永倉は吉村と同じく北国出身の脱藩者であるが、京の市中で所帯を持つ立場では、国元に妻子を残してきた者の事情は想像できない、ということ。

⑤ 永倉は吉村と気性が似通う部分があるが、新選組での立場が違い、似た性格でも立場が違えば考えも違ってくることは分かっていたいなかった、ということ。

問 4 文章中の空欄に入れるのに最もふさわしい内容を次の①～⑤のうちから一つ選べ。

17

- ① 永倉の力は、わしと源之丞では止めようがなかった
- ② 永倉の友情というものが、いやというほどわかった
- ③ わしと源之丞も、吉村に腹を立てていた
- ④ 吉村も、内心それを望んでいるように思われた
- ⑤ 永倉は、吉村を相手に手加減しないほど馬鹿な奴ではない

問5

傍線部C「あの大使の永倉が、吉村の顔をさんざんに殴りつけながら泣いているよ」とあるが、この時の永倉の心情はどのようなものだと考えられるか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

18

① 人としての正しさや美しさを持つこの吉村だけは死なせまいと、自分を始め源之丞や新選組幹部たちが真心で動いているのに、その吉村の正しさや美しさによってかえって自分たちの真心が届かないことが悔しくてならない。

② 自分たちはいずれ死ぬが、素朴で純粋な吉村だけは死なせまいと皆で考え、どう考えても最善の道を準備しているにもかかわらず、妻子への愛情に惑わされてその道の価値すら理解できないでいる吉村の愚かしさが疎ましくてならない。

③ みよと夫婦になりさえすれば平穏な人生を送れるのが分つていながら、国元に残してきた妻子を理由にそれを拒む吉村を見るにつけ、その吉村を慕うみよの真心が無残に踏みにじられるのがふびんでならない。

④ 吉村の気の毒な境遇に同情し、国元に残してきた妻子のためにもこの男だけは生き延びさせようと皆で動いているにもかかわらず、妻子への真心によって吉村がその提案を受け入れられない運命の皮肉が呪わしくてならない。

⑤ 自分を始め源之丞や新選組幹部たちが特別な配慮を示しているのに、足軽や百姓の出自を盾にしてこちらの善意をかたくなに拒み、借りを作るまいとする吉村のかわいげのなさが腹立たしくてならない。

問 6

この小説の題名「壬生義士伝」の「壬生義士」とは吉村貫一郎を指している。この文章から読み取れる吉村貫一郎の「義」とはどのようなものだと考えられるか。内容として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

19

- ① 妻子を養うためにやむを得ず国を捨てても、妻子には決して国を離れさせることはせず、郷里への思いを保ち続けること。
- ② たとえ望ましい境遇であつたとしても、他人から恩恵を受けるのではなく、運命は自ら開いて独立の精神を保つこと。
- ③ 己のために尽くしてくれた相手への恩を決して忘れず、その相手が死地に赴くのであれば、己一人の安穩を捨ててその相手と生死をともにすること。
- ④ いたずらに富貴を求めめるのではなく、たとえ貧しく卑しい境遇にあり続けるのだとしても、夫や父としての務めを決して放棄しないこと。
- ⑤ たとえ富貴が目の前にあるとしても、周囲の人々への配慮を忘れず、富貴を得られるのが自分一人しかないのであれば、むしろ富貴を捨てること。